

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.32（2015年11月号）◆

比較的穏やかな秋から足早に初冬の寒さがしみる頃になりました。皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。年内は11月28日、12月26日に研究会を開催予定です。また、新年1月30日には百回記念研究会を予定しております。詳細は後日お知らせ致しますが、ご予定の上、研究会にお運び頂ければと思います。なお、『Intelligence』ご愛読の会員の皆さまには、ニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> および会員向けブログをあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】会員向けブログでのエッセイは、すでに四回目まで掲載しておりますが、お楽しみ頂いていますでしょうか。三回目は山本武利先生、四回目は鈴木貴尊先生がご執筆です。また、このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【国際シンポジウム：日中戦争とメディア】（11月2日（月）午前10時～18時45分）

11月2日、大雨の悪天候の中、100名を越える方々にご参加いただき、無事、盛会のうちに終えることができました当シンポジウムは、下記の3つのセッションから構成されていました。

・第1セッション「日中戦争と中国における日本のインテリジェンス活動」：

土屋礼子「中国大陸における外務省の新聞雑誌調査」、山本武利「満州での日本の諜報活動」

・第2セッション「日中戦争をめぐる戦中戦後の検閲」：

安野一之「『内閣綴』にみる1940年の出版検閲」、陳セジョン「1950年代上海における社会主義メディア検閲システムの成立」、討論者：梅村卓

・第3セッション「教科書における日中戦争の記述をめぐって」：

小林聡明「『歴史教科書問題』と1980年代の東アジア国際関係－韓国外交の視点から考える」、蘇智良「中国歴史教科書における日本に関する叙述」、討論者：梅森直之、陳麗菲

第1セッションでは、いくつかの新しい資料が紹介され、それをめぐってフロアとの熱い議論がたたかわされました。第2セッションでは、検閲に焦点をあてた発表が行われました。ここでも興味深い資料が紹介されたほか、韓国からの報告者には、これまであまり論じられることのなかった中華人民共和国の検閲システムについて貴重な報告をいただきました。第3セッションは、教科書の歴史記述と、それをとりまく「政治」の報告となりました。中国からの報告者には、中国の歴史教科書における日本関連の記述が、どのように変遷してきたのか、あるいは変遷してこなかったのかについて報告いただきました。

シンポジウムでの研究報告や議論を通じて、あらためて「中国」を考えることの意義が浮き彫りになると同時に、どのようなアプローチから、いかに考えていくのかという「当然」の課題に向き合うことの重要性も再認識させられることとなりました。

※ なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●次回の20世紀メディア研究会は、11月28日(土)で、河キョンジンさん、松岡昌和さん、

小野耕世さんをご報告の予定です。その後は、12月12日(土)に謀報研究会、12月26日(土)に第99回20世紀メディア研究会を予定しております。また、研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【気になる新著紹介】

吉田裕ほか編『アジア・太平洋戦争辞典』(吉川弘文館)は、先の十五年戦争を知るための基本事項や人物をまとめた辞典。『ひとびとの精神史』(岩波書店)第一巻「敗戦と占領」および第二巻「朝鮮の戦争」は、様々な人物の話から戦後を描き出す試みの論集。岸富美子・石井妙子『満映と私』(文藝春秋社)は、満映に勤め、戦後は中国共産党とともに活動した岸富美子の手記とインタビューを基にした記録。崔銀姫『日本のテレビドキュメンタリーの歴史社会学』(明石書店)は、占領期の放送政策や「街頭録音」から「日本の素顔」などの番組の分析を通して、戦後日本のテレビドキュメンタリーの歴史を論じている。

【コラム】被災地・石巻を再訪して

先日、東北に行く機会があり、石巻まで足を伸ばしてきた。前回は、震災から1年後の2012年3月に訪れたので、実に3年半ぶりの訪問であった。前回は仙石線が不通になっていたが、今年の5月末に全線再開したため、鉄道での訪問となった。仙石線の車内は、通学・通勤客だけでなく、松島を訪れる観光客であふれており、復興の息吹を感じた。

だが、それは一面的な印象であった。石巻の駅前や商店街こそ、復興の様相をみてとれたものの、津波で大きな被害を受けた海沿いの地域では、多くの場所で、更地になったまま、ぺんぺん草が生えていた。一度離れてしまった住民の多くが、もどってきていないことを感じさせる光景を目の当たりにした。復興そのものが遅れているだけでなく、高齢化や過疎化が、追い打ちをかけているように思われた。

一方で、希望も見出せた。若者たちが、新たなスタイルのカフェや飲食店などを始めていたことであった。彼ら・彼女らの多くは、石巻以外から来た人々だと思われる。高齢化や過疎化にあえぐ地域に、若者が集い、新たなビジネス、産業を立ち上げようとしていること。このことに、被災地復興に向けた大きな可能性を感じたのである。

震災からまもなく5年が経とうとしている。すでに震災の記憶の風化が、しばしば指摘されるようになっている。被災地が、今なお直面している課題とは何か、そこで、今何が起きているのかについて、あらためて、しっかりと向き合いたいと思わせる石巻への再訪であった。

[11月25日付 文責：小林聡明]